

詩余ものがたり 北宋編（五）

— 清・葉申卿『本事詞』 —

松尾肇子

五十七、周邦彦と李師師

周邦彦（字は美成）は音律にくわしく、新しい調べを作る毎に、都の音楽署の教坊では競って伝え唱いました。汴京で、李師師の家に泊まったことがあり、彼女のために「洛陽春」を作った次のように言いました。

眉は春の山とすばらしさを競いあっているのに、
残念なことにもいつもひそめられている。
清らかな涙で花の枝を濡らしてはいけない、
花もまたあなたのように瘦せてはいけないから。

清らかにしっとりとした玉の簫の音がしずかに長く響くが、
分かってくれる人はほとんどいない。
日ごと手すりによりかかる愁いを知りたいならば、
あずまの前の柳にたずねてごらん。

李師師は身を預けたいと思いましたが、かないません。ある夕べ、徽宗皇帝が李師師の家へおでましになり、周邦彦は慌てましたが避ける

ことが出来ず、二重になった壁の間に隠れました。皇帝は初物のミカン一個を自ら携え、江南からの新しい献上品だといい、共にたわむれて語り合いました。周邦彦はこれをすっかり聞いて、そこで「少年遊」を作りました。

并州の刀は水のように、
呉の国の塩は雪よりも白く、
ほっそりとした指が新しいミカンをむく。
錦のとばりはようやく温まり、
獣の香炉の煙は途絶えることなく、
向かい合ってすわり笙を調える。

ささやき尋ねる、どこに泊まろうかと、
まちはもう夜更け。
馬はしっとりと降りた霜に滑るから、
行くのはやめたほうがよい、
道行く人もまったくいない。

別の日、師師が皇帝のためにこれを歌ったところ、誰が作ったのかとおたずねがあり、周邦彦の名を答えました。皇帝は大変にお怒りに

なり、すぐに役人に（周邦彦を）都の外へ追い出させました。翌日、皇帝がまた師師の家を訪ねると留守でした。お座りになったまま待っていますと夜も八時頃ようやく帰ってきましたが、泣いてひそめる眉、涙あふれる目、悲しみの様子は手に取るようです。皇帝が問い詰めると、周邦彦が罪を得て都を去るので、町外れで杯を上げて別れの宴を開いており、陛下のご来訪を知らなかったと答えました。皇帝が詞を作ったかとお尋ねになったところ、「〔蘭陵王〕の詞を」との答え。皇帝が「一度歌ってみよ」と言うので、師師は袖を整え、杯を捧げて歌いました。それはこのようでした。

柳の木陰がまっすぐに、

もやにつつまれて細くしなやかな枝が緑にゆれる。

隋の運河の堤で、かつて何度見たことだろう、

水を払って柳絮を舞わせ旅人を見送る風景を。

高みに上って故郷を望み見ても、

誰が知っているだろうか、

花の都を離れた疲れた旅人のことを。

宿場の道では、歳月が行き歳月が来て、

折られた柳の枝がもう千尺を越えたに違いない。

しずかに昔の足跡を尋ねる。

またも酒は悲しい曲を追い、

灯火は別れの宴席を照らす。

梨の花と楡の火とが寒食節をせきたてる。

矢のような風に船は速く、

暖かな波にさおをさし、

振り返ればはるばるといくつもの駅を過ぎて、

空の北にいるその人を望む。

詩余ものがたり 北宋篇（五）

嘆き悲しみ、
恨みは積もる。

次第に別れの水辺はまといめぐり、

船着き場はひっそりとしてくる。

夕日がゆっくりと落ちて春は果てしない。

懐かしく思うのは月が照らす建物で手を携え、

露の降りた橋で笛を聞いたこと。

過ぎ去った出来事を静かに振り返ると、

夢にも似て、

涙をひそかにこぼす。

皇帝はたいそうよろこび、すぐに召し返して音楽所の長官としました。
ああ、君主たる者が、このように振る舞うとは、（南唐の末代皇帝）
李煜の生まれ変わりだと伝えられるのも、もっともです。

五十八、周邦彦と岳楚雲

周邦彦が蘇州にいたとき、宮妓の岳楚雲と恋仲になりました。のちに都から蘇州に立ち寄ると、彼女はすでに蘇州に他人のものになっていました。そこで宴にことよせ、太守の蔡巒（字は子高）の席上、彼女の妹に会い、「点絳唇」を作って贈りました。このような詞でした。

遼かなたから鶴が帰ってくると、

昔なじみはたつぷり心を痛める。

短い手紙を送ることもできず、

手紙を運ぶ魚も空しく千里の波を泳ぐばかり。

桃根のような美人（が待っていてくれるの）をたよりに、
恋の思いを告げたのだった。

愁いは果てしなく、

昔の袖に、

まだ春の東風の涙が残っている。

楚雲は詞を手に何日も泣き暮らしました。

五十九、周邦彦と溧水リッスの歌姫

周邦彦が溧水の県令だったとき、主簿の歌姫が美しくて賢く、周邦彦は酒席でうちとけて親しくし、「風流子」を作りました。それはこのような詞でした。

新緑の小さな池のつつみ、

風に簾が動くと、

影を碎いて夕日に舞う。

思うのは金の建物を行き来する、

昔なじみの巢作りに忙しい燕。

苔がぐるりと生えている、

以前の苔むした垣根。

美しい建物の中 鳳凰を刺繍したカーテンの奥深く、

管弦の音が聞こえてくる。

言おうとしてはやめ、

恋人の便りに背くのではないかと恐れる。

歌うよりも先に咽び泣き、

愁いはきよらかな音にまわりつく。

ひそかに思う化粧が終わると、
赤い扉をひらき、

月を待つのは西の軒端。

一番苦しいのは夢の中でも魂が、

今宵はあなたのところへ行き着かないこと。

いつになれば交わせるのか、

密かな約束、

秦嘉のように鏡を送り、

韓寿のように香をひそかにとりかわそう。

天があの人に、

しばし会わせてくれるのに何の妨げがあるだろう。

新緑、待月は、どちらも役所の建物の名です。この詞はまわりつくような情趣の極みで、正しい教えで整えれば、風雅を傷つけることはなかったでしょうに。

六十、周邦彦が夢の中で得た詞

周邦彦は待制提舉南京鴻慶宮となったために、杭州コウシュから睦州モクシュに住まいを移した時、夢の中で「瑞鶴仙」を作り、目が覚めてもその詞をすべて覚えていたのですが、その意味がまったく分かりませんでした。ほどなく、方臘の乱が起こり、杭州のもの住まいに帰ろうとしましたが、道中はどこも既に戦乱となっており、やっとのことで抜け出すことができました。

錢唐門を入ろうとすると、杭州の人々があたふたと避難するのに遇いました。見れば夕日が城壁の角の鼓樓の軒端にかかっています。はっと、詞中の、

夕日が山に照り映えながら落ち、
空に残る紅は、

まだぼつんと建つ城郭の角を恋しがるようにだ。

と言うのが、これに合うことを悟りました。

もとの住まいには行くこともできないうえ、食事を求めるところもありません。ふと「待制はどちらへ行かれるのですか」と呼ぶ声がしましたので、振り返ってみると、同郷のなじみの召使いが、さらに「日が傾きましたが、食事をおすましでないとお見かけしました。一緒に店に行きませんか」と言います。彼女について行き、たちまち立て続けに数杯飲み、お腹がすいていることに気づきました。つまり、

波の上を歩くかのような神女の歩みは弱々しく、

旅籠に立ち寄るのにどうして前もって約束が必要だろうか。

飛び過ぎるウグイスの鳴き声が私に勧めるものだから、

鞍をとき、

ゆるやかに春の杯を傾ける。

という句は、（これに）合っていたのです。

飲み終わって、ほろ酔いで、耳も目もあやしくなったのを感じましたので、もう留まろうとせず、まっすぐ町の北の江漲橋に出ました。寺々には男や女がいっぱいでしたが、とある小さな寺の経堂だけ、たまたま人がいなかったで、そのままそこに泊まりました。つまり、

帰ったのは夕方早くだっただろうか、

馬に乗るのを誰が助けてくれたのか、

朱色の建物に酔って眠る。

詩余ものがたり 北宋篇（五）

という句は、これに合っていたのです。

この後、浙東も浙西もすでに賊軍に占拠されたと聞いたので、考えをめぐらし、管理している南京の鴻慶宮にはまだ住むことのできる部屋がありますから、家族をつれて行きました。そこで、

思えば西の庭はどこも花が深々と咲いているのに、

東風はどうして又意地悪をするのか。

時の流れ去るのに任せ、

仙人の住む場所に帰ってきて楽しもう。

という句も又これに合っていました。

周邦彦は日頃好んで詞を作りましたが、晩年には夢の中で句を得ると、どれも事実の中しました。どうして偶然ということがありましようか。

六十一、李師師

李師師は、汴京の名妓で、周邦彦だけが彼女に深く心を寄せたわけではありません。当時の多くの名士にも、彼女にあてて贈った詞がたくさんあります。

晏幾道には「生查子」があり、次のように言います。

遠い山のような眉は長く、

細い柳のような腰はなやか。

装いを終えて春風に立ち、

ひとたび笑えば千金でも足りない。

詩余ものがたり 北宋篇（五）

宮城に帰ったら、

話そう妓楼への道々、

穎川の花を見つくしたが、

師師のすばらしさには及ばないと。

また、次のようにも詠んでいます。

散り落ちた梅があずまやに香り、

かぐわしい草が萌え出でて池のつつみは緑。

春の恨みを気に掛けていると、

月は手すりのかどを回ってしまった。

いつになれば花の間で、

心ゆくまで花の枝を見ることができるのだろう。

酔った後は家を懐かしむことなく、

師師の宿を借りよう。

秦観しんかんにも「一叢花」があつて次のようです。

昔の今夜 師師に会った、

両頬は酒に赤らみしっとりとしていた。

疎かな簾を半分巻き上げればほのかな灯のむこう、

露の上にはもやがたゆたい涼しい風が吹いていた。

かんざしを挿したまげは乱れて崩れ、

人に寄り添ったまま起きることなく

涙をぬぐって新しい詞を歌った。

逢瀬は 思いもかけず 長らくすれ違い、

愁いの情緒はひそかに糸を結ばれる。

妙なる舞いと清らかな歌声とを楽しむ夜のはずなのに、

またも秋の風景にむかつて嘆くのだ。

ただ美しい楼には、

あの時と同じ白く輝く月があつて、

二人の恋人をそれぞれに照らしている。

張先にいたつては特別に新曲を作つて、名前そのまま〔師師令〕と題をつけて、次のように詠じています。

螺鈿のかんざし 宝石の耳飾り、

菱花の鏡を払えば水のように澄み切つて、

化粧をすれば 皆口々にほめそやす 時世の好みにかない、

おしろいの顔には天然の春の気配があると。

蜀錦の色どりゆたかな衣 髪飾りはつけず、

朝焼けが地に垂れるにまかせている。

都の庭園ではモモとスモモとが自慢して、

東風に尋ねる 何に似ているかと。

扇子をめぐらせて清らかな歌声を遮るには及ばない、

唇はぼつんと、赤い蕊よりも小さい。

おりしも すがれた花が月とともに落ちていく、

この思いを千里のかなたに届けよう。

六十二、司馬しば馬ば燠ゆ

司馬燠（字は才仲）が洛陽にいた時のこと、たまたま昼寝していて、一人の美しい女性を夢にみました。彼女はとばりを掲げて歌いました。

私は錢塘江のほとりに住まい、

花が落ち花が開いて、

流れるように年月が過ぎていくのにも構わない。

燕が春の景色をくわえて行つてしまひ、

薄絹の窓には幾たびの梅雨の雨。

司馬頰はその詞が気に入る、そこで曲調名を尋ねますと、「黄金縷」と答えました。のちに司馬頰は蘇軾の推薦で錢塘の役人になりました。秦觀（字は少章）がその時錢塘の尉でしたので、司馬頰はそのことを言いました。秦觀は即座にその続きを作りました。

雲なす髪にサイの角の櫛を斜めに挿せば月が半分吐き出されたよ

う、

檀板を軽く打ちながら、

〔黄金縷〕を歌い終える。

夢は美しい彩りの雲に断たれて探すこともできず、

夜は涼しく明るい月が南の浦に上ってくる。

数日後の夜のこと、司馬頰はふたたび夢を見、先の美人が笑顔で「以前から親しくなりたいと願っておりました」と言う、そのまま夜と共にしました。これ以来毎晩必ずやってきました。司馬頰がまた同僚にこの事を話しますと、皆が「役所の裏に昔々の美女蘇小の墓があります、幽霊ではありませんか」と言いました。その年のうちに司馬頰は病氣にかかりました。彼が乗る美しい船は、いつも湖のつつみにつないでありました。ある日、船頭はふと司馬頰が一人の美女を連れて船に乗るのを見ましたが、急に前のほうでポツという音がしたかと思つと、たちまち船尾に火がおこり、あつと言う間に燃えてしまいま

詩余ものがたり 北宋篇（五）

した。あわてて知らせに向かいましたが、役所に着いたときには司馬頰はすでに亡くなっていました。

六十三、黄大臨

黄大臨（字は元明）が廬陵の県令となり、あるとき役所の宴席に出席しました。宴会中、頭巾の帯がたまたま脱げたので、知事は側の妓女に命じて縫い合わせました。終わりますと、彼女は黄大臨に詞を作つて欲しいと願いましたので、すぐに「七娘子」を書き取らせました。それは次のようなものです。

美しい座敷に銀の燭台が明るくともり昼のよう、

頭巾を落とした（郭）林宗が乱れた頭を羞じているのを見た。

針は花の枝を借り、

糸は薄絹の袖から抜き取り、

たちまち二本の帯はもとどおり。

どうか 逆さまにかぶろうとも これより後、

陶淵明が頭巾で酒を漉したまねはなさいませんよう。

寶石をちりばめた箱に隠しても、

濃い香がしみ透ってくるのは、

葱のように白い十本の指が触れたから。

黄大臨は、黄庭堅の弟（筆者注…兄）です。

六十四、徐伸

徐伸（字は幹臣）は、政和年間の初めに、音楽に通じているという

詩余ものがたり 北宋篇（五）

ことで太常典樂になりました。のちに常州ジョウワンの知事に転出しました。かつて「転調二郎神」をみずから作り、次のように言いました。

煩悶しているのに（幸せが来ると告げて鳴く）カササギに弾をうったが、

またも簾にうつる花の影が乱れ砕かれただけ。

なんということもなく春の衣服を着てみれば、

（縫ってくれた）白く細い手をまた思い出したが、

金の獅子の香炉は火も消えて冷たい。

ともすれば引き起こされる愁いをどうしたものか。

いたずらに怪しむのだ 新たに病が増えたのを。

ああ 昔はあの沈約しんやくのように瘦せ細り、

今は潘岳はんごくのような白髪頭、

鏡に向かうのには耐えられない。

何度も思い返す。

別れの時に涙にひたった、

薄絹の襟は今もお湿っている。

思ってみる 私のためにぐったりと、

日が高くのぼっても起き上がらず、

いつも春の酔いにかこつけているのではないかと。

雁は手紙を運んで来ず、

馬は通り過ぎて行き、

門は美しい庭の風景を閉ざしている。

空しくたたずみ、

一日中手すりに寄りかかったまま、

日は長く 誰もいない。

おりから開封カイホウの知事であった李孝寿リコウジュが呉門ゴモンの知事に転出することになりましたが、李氏が都を厳しく治めていたことは、遠きも近きもうわさに聞いておりました。道中、毘陵ピリョウを通るので、徐仲は盛大に音楽を催してもてなしました。集めた妓女たちには、この詞を歌い競わせ、必ず李孝寿が尋ねるのを待つようにと、あらかじめ命じておきました。妓女は命令にしたがって何度も歌いましたので、李孝寿は思ったとおりこのことを尋ねました。徐仲は心配そうに鼻柱に皺をよせて言いました。「私には召使いがおりまして、容姿も芸もことのほか素晴らしいものでした。以前、亡き妻が許しませんでしたので、去らせました。近頃聞きますに、蘇州の某都督のところに居るとのことです、来て欲しいと何度も手紙をやったのですが、主人が物惜しみするので、胸に思うことがありましてこの詞を作りました。今幸いにも、あなた様がこの地におこしくございました。私のためにこのことをお考えいただけませんか。どうか。」李孝寿は喜んで、「難しくはない。心配するな」と言いました。

郡の境まで来ますと、来客が面会の順番を待っておりましたので、李孝寿は役人に言いつけて町から十里離れた楓橋で出迎えさせることにしました。翌日、船をそこに着けました。出迎えの役人たちは、評判を聞いて恐ろしさのあまり足が震えておりました。李孝寿は名刺を見ると、たちまち激怒して「都督は法律により町を出ることは許されないのに、なんとここに来ておる。郡内に万一火事や盗みがあれば、危ないではないか」と言い、都督をせめて位階を下げ、かせをはめて獄に送りました。数日して、その供述書と判決書とを求めました。都督の息子はおそれおのき助けを求め、手を尽くして頼みました。李孝寿は笑って「徐典樂の妾を返してやればわかるであろう」と言いました。都督は命を受けて、すぐさま送り返しました。けれども後には彼女を棄ててしまったのです。

六十五、王彦齡おうげんれい

王彦齡（字は齊叟さいそう）は、元祐年間に、男伊達で有名でした。生まれつき口がうまく、詞曲が得意でした。妻の舒氏じゆしも文筆に巧でしたが、その舅は武人でした。王彦齡は好きな酒を飲むたび、舅をからかいました。舅は耐えきれず、娘を取り返すと、離婚させてしまったのです。娘はなおも再婚せず、ある日池のほとりに行き、元の夫を思って、「点降唇てんかづち」を作りました。

ひとり流れのそばに立ち、
煩悶しながら無理に欄干に身を寄せる。

昔の愁い 新たな恨みが、
季節の興趣をすり減らす。

サギは飛び去り魚は沈み、
もやはおさまり風はようやく止んだ。

波心が静まり、
鏡のように人を映しても、
昔の面影は無い。

六十六、毛滂もうぼう

毛滂（字は沢民たくみん）は詞に大変巧みで、「惜分飛」の一曲が蘇軾に賞賛されて、名を知られました。金銭をもらっての曲の贈答も多かったのです。かつて衢州知事の孫公素の宴席で、歌で食事を勧める者が七急拍に合わせて七拝して酒を勧めましたので、彼女のために「剔銀灯」を作ったように言いました。

詩余ものがたり 北宋篇（五）

簾のあたりでは風光はおのずとたっぷり。
春が宴席の屏風の折れたあたりにやってきた。
玉のかめにはクリームのようにとけた（酒）、
杯には闘うように細かな泡が浮かび、
花は鄱湖ぽこの寒々とした緑の水面に映る。
汨羅びつらの川にひとりを悲しみ、
あたりの紅い花や群がる翠とは違っている。

出会いも別れも悲しみも喜びも矢のように速く、
杯を取り換えないうちに続いてやって来る。
しきりに銀の燭台の灯心をかき立てながら、
別に象牙の拍板を聞けば、
なおも龍のあぶらの蠟燭がもっている。
刺繍を施した薄絹には香りがたきしめられ、
美しい瑟のあたり、
酔った玉のような人にまとわりつく。

また深夜、陳興宗ちんこうそうの館に集まり、彼の寵愛する歌姫が酒を勧めてくれたときには、彼女のために「踏莎行」を作って言いました。

生まれついで柔らかな麗質、
粧いは光がゆれるよう、
可愛らしい仕草で酒を勧める。
若々しい桃 繁る杏はもとよりあやしく美しく、
美しいおしどりのような主人と彩りあざやかな鳳凰のような彼女とが寄り添っている。

詩余ものがたり 北宋篇（五）

ヨモギのような緑の濃い香り、

ガチョウのような薄黄色にかもされたばかりの酒、
雲を縁取るように清らかな歌声が上っていく。

夜の寒さは刺繍の芙蓉には近づかず、
酔いながらも春と向かいあっているのを感じる。

また小^{しょう}という名の官妓が、詞を欲しがりましたので、彼女のために
〔虞美人〕を作って言いました。

柳の枝さえ腰のなやかさをまねて、

江東の小に似たがる。

春風が緑を吹いて眉の峰に上らせて、

その素晴らしい色香は流れようとして断たれることなく まなざ
しの波は融けるようだ。

軒端に月がのぼり 灯芯の先の花形の燃えかすが落ち、

風が余香を運んで過ぎる。

小さな喜びは雲のように散って もはや集めようもなく、
到るところ 冷たいもや 寒々とした雨があなたのために悲しん
でいる。

また酔った妓女にたわむれて〔青玉案〕を贈りました。

玉のようなあの人が私のためにねんごろに酔ってくれ、

酔った姿態にも、

美しさを添える。

斜めになった冠から釵が落ちようとしている。

桃の花に空気は暖かく、

露は繁く もやは重く、
春の思いを禁じはしない。

緑の榆の木陰を東へと流れていく川、

だんだんと近づくのは、

わびしい土地。

明るい月がベッドまで忍び込み もの思いに眠れない。

眉根に皺を寄せ、

誰のために言葉もなく、

陽関の別れの涙を押さえるのか。